

行動する環境アドバイザーの会報

# グリーンニュース 第56号



撮影地：安中市

稲の刈取りが終わった後の田んぼに良くみられます。

「わらぼっち」後方の山は妙義山です。

藁を乾燥させるため、或いは春になってから田んぼに漉き込むためかと思われます。

地方によっていろいろ形が変わりますが、群馬県では三角に組むのが一般的なようです。

- P1 表紙(提供 田中 和夫氏)
- P2 環境政策課より、
- P3 須永代表より、
- P4 温暖化・エネルギー部会、自然環境部会
- P5 ごみ部会、広報委員会
- P6 安中地区会(鬼形 明房氏)より
- P7 高崎地区会(原田 邦昭氏)より
- P8 若者からの紹介(前橋工科大学院生)

発行年月日 平成 25 年 9 月 25 日  
発行責任者 群馬県環境アドバイザー連絡協議会  
代表 須永 徹

前年度(第 8 期)の県環境アドバイザーは 327 名の登録をして頂いておりました。第 9 期(登録期間:平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日)への更新登録者は 203 名でした、今期の新規登録者を含め平成 25 年 9 月 20 日現在 261 名です。 前期同様、各地で活躍されています。

※ サポセンブログ <http://saposen.kazelog.jp/> から  
グリーンニュースのカラー版がダウンロードできます

サポセンブログを携帯、スマホで見よう  
QR コードを読み込んでスマートフォンの  
設定で、グリーンニュースも読めるよ



## 『こどもエコクラブ学習会』が開催されました。

環境政策課 松村 賢一

前回に引き続き、こどもエコクラブについてお知らせしたいと思います。群馬県こどもエコクラブの年間での大きな行事の一つ「こどもエコクラブ学習会」が平成 25 年 8 月 31 日(土)に北毛青少年自然の家において開催されました。7クラブ、95 人のメンバーとサポーター(子どもと大人、事務局員含む)が参加してくれました。

午前中には、北毛の職員さんたちの補助をいただきながら、植物ウォッチングラリーを行いました。この活動は、施設に生える樹木を題材にしたビンゴゲームに取り組みながらチェックポイントをまわっていく活動です。最後は道すがら摘んできたオオバコの引っ張り勝負(私も子どもの頃よくやりました)で盛り上がりました。

午後はネイチャーゲームを行いました。これは専門の講師を招いてやるのですが、色々な体の動き、五感をはじめ色々な感覚を使って取り組みました。初めての参加をした子どもたちもたくさんいましたが、最後は楽しく元気いっぱいやっていました。

冬には交流会も行われます。アドバイザーの皆様におかれましては、近所の子ども、親戚の子どもを誘ってエコクラブ活動を始めてみませんか?

興味のある方は、群馬県環境サポートセンターまでお問い合わせください。



こどもエコクラブに関するお問い合わせや情報は…



群馬県環境サポートセンター

TEL 027-226-2827

FAX 027-243-7702

群馬県こどもエコクラブホームページ

<http://www.pref.gunma.jp/04/e0110035.html>

こどもエコクラブ全国事務局

(公益財団法人 日本環境協会)

TEL 03-5643-6251



## 環境のことに興味をもったきっかけ

群馬県環境アドバイザー連絡協議会

代表 須永 徹

環境アドバイザーの皆さんも、なにかしらの切っ掛けがあつて環境アドバイザーに登録をされたものと思いますが、今日は自分の例をお話ししたいと思います。

今から 10 数年以前の私は、特別に環境問題に関しての興味や関心はなく、普通にサラリーマンとして東京で単身赴任生活をしていました。

ある日現場から『お客様から、ISO-14001 の取得について尋ねられたが、どういうものか?』と言う問い合わせがありました。そこで調べてみると、産業界を中心に、このマネジメントシステムの導入が推進されつつあることが分かり、これは事業を行っていく上で必要になるだろうとの思いで経営層に上申したところ、それなら自らが担当となって取得を目指せということになり環境部門を立ち上げ、このシステムの全社導入を図ったことが環境と言うことへの関わりの第一歩でした。

この活動を通して、社外で環境問題に携わる様々な方と知り合えることができ、環境問題への関心が高まりました。その頃に県に環境アドバイザーの制度があることを知り、県内での環境活動が出来るかも知れないと思い登録をしましたが、まだ単身赴任中でありアドバイザーとしての活動は定年となるまで出来ませんでした。定年と同時に、友人達とNPOを設立し“こども達が環境って大事だよねと気付く場面を作る”と言う事で「おおた・町の先生見本市」や「アース・ビジョン地球環境映像祭 in おおた」などを開催しています。

“環境“に関することは、幅は広く奥も深いことが多いので、とても専門家として活動できる訳ではありませんが、アドバイザーの一員として環境意識の高い大人としての自覚は忘れずに活動していこうと考えております。





## お知らせ

みなさんこんにちは。それにしても暑いですね～。しかもこの辺は全然雨が降らないし・・・。  
体調管理にご留意ください。

さて当部会では下記の通り定期会合を開催しているので改めてお知らせいたします。

奇数月の第4土曜日 10時～12時 於：群馬県地球温暖化防止活動推進センター

(※原則的な日時設定です。変更になる場合もあります。)



従って次回は9月28日(土曜日)になります。※予定変更の場合は  
メーリングリスト及びGNにてお知らせします。

更に当部会では連絡をスムーズにするため当部会の酒井さんにメー  
リングリストを作成していただきました。酒井さんのアドレス  
([chitomi@sokusetu.com](mailto:chitomi@sokusetu.com))までメーリングリストに登録希望と書いて  
メールを送ってください。 ※2013/08/15 現在の部会登録者は9名  
です。

メンバーのそれぞれの活動やイベント開催などありましたらご活用  
下さい。

(温暖化・エネルギー部会長 田口 勇夫)

## 昨今の異常気象について

前略、去る9月2日の竜巻の報道には、皆様も「おどろき」と  
「恐怖」を感じられた事でしょう。マスコミも様々な角度から  
報道され、どう対処すれば良いか思案に苦しみませんか。

新聞紙上では進む温暖化「竜巻を生む」や「大気不安定化増  
加」「巨大積乱雲スーパーセル」などにぎやかです。自然現象  
と言えは簡単ですが、原因は「人間の生活の有様」となれば、  
考えなければなりません。

環境アドバイザーの一員として議論と行動を、出来ることから  
始めましょう、自分と地球環境を守る問題として。



テーマ 食とエネルギーの分野でどれだけCO<sub>2</sub>を削減できるでしょう。知恵を絞って無駄な電気、  
エネルギーを出さない「やればできる」を体験してみましょう。



(自然環境部会長 宮崎 亮二)

## 雑古紙の分別収集を



言うまでもなく廃棄物の収集及び処理は、市町村単位で実施している。ごみと資源物の出し方も市町村ごとに決められているので、統一されていない。地域にあった対策がとれて便利な反面、転居などの際には混乱することも少なくない。たとえばプラ容器、ペットボトルの蓋などの扱いが、市町村により異なっている。焼却炉の性能やリサイクル品目の違いが原因と思われるが、何か良い解決法はないのだろうか。

ところで、高崎市ではごみ減量対策のひとつとして、燃えるごみの中に約36%もの紙類が含まれていることに着目し、雑古紙のリサイクルに力を入れている。古紙資源物の中には①新聞紙②段ボール③紙パック（牛乳パック、酒などのアルミ付きパック）④雑誌、その他の紙類がある。特に④の中のその他の紙類の分別収集を増やすことにより、燃えるごみの量を減らすもので、簡単にいくはずもないが、本当に燃えるごみが36%減ったら素晴らしいことだと思う。具体的には、菓子箱をたたむ、ティッシュボックスはビニールを取ってたたむ、窓付き封筒はセロハンを取って、カレンダーは金具を取って、煙草の箱は銀紙を取って、メモ用紙などはそのまま、紙袋に入れて紐でしばって出す。これだけでリサイクルになって、燃えるごみが減らせることになる。

どうしたら、より多くの方が雑古紙の分別収集を、自らすすんでしようと思うようになるのだろうか、それが問題だ。

（ごみ部会長 山田一朗）



## 日本における古紙利用の現状

日本製紙連合会および（財）古紙再生促進センターなどの資料によれば、2012年の古紙回収率は79.9%、利用率は63.7%と過去最高となっています。

回収率と利用率に大きな差があるのは回収工程でのロスもありますが、最近では東南アジアへの古紙輸出が増えているのが主な原因です。

古紙の種類別に回収率を見ると2011年実績で、新聞古紙144%、印刷情報用紙古紙47%、段ボール古紙108%となっています。折込みチラシは印刷情報用紙として生産され新聞古紙として回収されるのでこれを補正すると、実質の新聞古紙回収率は87%、印刷情報用紙回収率は62%と推定されます。

また段ボールに関しては輸入製品に付随して入る分がありこれを補正すると実質93%と推定されます。

このように、新聞古紙および段ボール古紙はほとんど限界に達していると思われるので、未利用の資源としては印刷情報用紙古紙、各家庭で廃棄されている紙類をどのように効率的に回収利用するかが課題となっています。

（広報委員長 田中和夫）

## 「酷暑が今後何十年も続いたらの不安」

記録を塗り替える今年の暑さを、誰しもが地球温暖化の影響か、と予想する。しかし、地球規模の温度変化の歴史を見ると、我が地球は過去三回(諸説によると四回)の氷河時代を経験している。そして今は次期氷河期の間(間氷期)と言われ、氷河の氷が解け、氷床が少なくなる時代にさしかかっているらしい。その証が、ヨーロッパ・ヒマラヤ・北欧の内陸氷河が、ものすごいスピードで氷床を失い、その跡に大きな池が出来ている。困ったことに氷河の削った跡の氷河湖の大半が決壊による大洪水の危機に瀕していると言われている。国際NPOのグループがそれを防ぐために誘導水路を懸命に掘っているが手つかずの湖も多く、このまま温暖化のスピードがエスカレートすれば最悪の大洪水が地球規模で大きな爪跡を残す結果を生むのではないだろうか? バングラディッシュの河から、実際にヒマラヤの高峰にしか存在しない石が発見される事実は、人類に何を語りかけているのだろうか。

我々にとって温暖化対策は小さな努力だが、氷河湖を源流に持ちながら、幸せな毎日を送る人々にとって、大洪水の危険から少しでも守ってやることは人類の責任であり、環境に負荷を少しでも与えない生活様式への大変換が急務である。近代国家が早く成長した国が環境破壊を続け、その結果、後進国がそのしっぺ返しを受けるのはあまりにもアンフェアではないだろうか。

既にブータン王国では環境美化のために、レジ袋の使用を廃止している。近代国家がなぜ、利便性から後戻りできないのだろうか。ネパール山群の登山基地であるポカラの町には、過去において間氷期の大洪水でできた百メートルに近い堆積層の断壁があり、その後、浸食で出来た川底のほとりで生活する人々が居る事実を知ろう。



(ダウラギリの朝)

(安中地区 鬼形 明房)

## たけのこ堀を体験して

高崎地区会の会員にも24年度から参加されている。NPO法人ふるさと再生ネットワークの会長、金澤文雄さんのお誘いで、5月15日(水)に高崎市吉井町上奥平にある、「中奥平ほたるの里」に行ってきました。



そこは山間で両サイドを丘に囲まれ、間には田んぼ、畑、池があり、その奥はキャンプ場、そして我等が目指した、竹林がその奥にありました。

金澤さんに聞くと、5月はたけのこ狩り、5月下旬に竹林の中で将棋大会。8月～12月にかけて「そばづくり」体験を計画しているとのことでした。

高崎地区会のメンバー10名が岩平小学校前の下奥平公民館に10:00に集合し、そこから「中奥平ほたるの里」に案内して頂きました。

まず、金澤会長からNPOの活動と年間行事、そして竹の子狩りの方法と、切り倒した竹をボランティアとして山から下ろす仕事の手伝いも仰せつかりました。

会員はそれぞれに鍬を借り、袋を提げて、急な斜面を登り、竹の子を探しました。しかし、ちょうど雨が降らなくて、竹の子が出てなく、探すのにひと苦勞でした。

やっと見つけて掘り始め、竹の子の根っこのイボイボが見えるまで掘り、そこで鍬を使い掘り起こすのですが、慣れない方は最初は大奮闘して汗だくでした。

そのうち慣れると、3本、4本と採れた方もあり、楽しみながらも獲得物は大きかったです。

NPOの会の方が焼いてくれた、新鮮な竹の子を頬張り、たのしいひと時はおわり、大きな竹の子を抱えてそれぞれ帰っていきました。

(高崎地区会長 原田 邦昭)



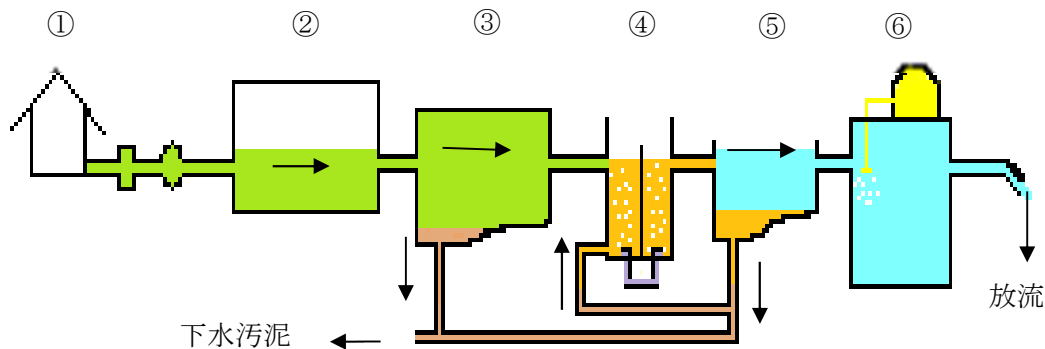
## 循環型社会の「水」に取り組んでいる若者の紹介

前橋工科大学、建設工学専攻(田中 恒夫研究室)に循環型社会の形成を目指して水環境整備の技術開発に取り組んでいる大学院生の柳澤さんがいます。「私たちが使った水」を河川や海に放流するための下水処理方法についてと、取り組んでいる研究について紹介してもらいました。

(広報委員会 梅山さやか)

## 水の大切さ!!

皆さんは知っていましたか？水道水が安全で飲める国は世界でたったの 11 カ国程度しかありません。「20 世紀は石油をめぐる領土紛争、21 世紀は水紛争」と言われています。いつでもきれいな水が水道から出る日本では忘れがちですが、石油と同様に水は有限であり、今でも地球上の多くの地域では深刻な水不足に悩まされています。ところで、家庭排水や工場排水がどのようにきれいになるか知っていますか。ここでは、水をきれいにする下水処理の仕組みを簡単に説明します。



①家庭排水： トイレ又は風呂・炊事・洗濯に使った水は、汚水マスを通して污水管に流れます。

②沈砂池： 下水中のゴミ・砂をスクリーンや沈砂かきあげ機などでとり除きます。

③最初沈殿池： 下水をゆるやかに流して泥を沈めます。

④二次反応曝気槽： 微生物を多く含んだ汚泥(活性汚泥)を加え空気を吹き込みます。この間にこまかい浮遊物や有機物(汚れ)は微生物によって分解され沈殿しやすい汚泥に変わります。

⑤最終沈殿池： 沈殿しやすい状態になった汚泥をこの池で沈殿させ、きれいになった上澄水は次の消毒タンクに送ります。

⑥消毒槽： 大腸菌などの細菌が含まれているので、この池で次亜塩素酸ソーダを注入して消毒し、放流します。

このようにして水はきれいになります。きれいにした水もちょっとしたことで汚してしまいます。一人一人が意識して水を大切にすることで、未来まできれいな水を守れるでしょう。

私の研究は微生物固定化法といい、活性汚泥ではなく微生物を特殊な担体に固定化し汚泥発生量や施設のランニングコストを抑えることが目的である。一言でいえば、微生物の「お菓子の家」を作る研究である。きれいな水を維持するために日々努力している。

(前橋工科大学 建設工学専攻 大学院生 柳澤 敬義)